

第1章 「ヒジュラ」 暦が語るウイグル・ディアスポラ集団の形成

はじめに

序論においては、イスラーム教徒移民の性格を示すために「ヒジュラ」や「ムハジール」などといった宗教的用語がトルコにおける移民研究において用いられてきたことを簡潔に概括した。第1章においては、ウイグル人の移民過程における「ムハジール」という行動を示す際に用いられる「ヒジュラ」の概念が、どのようなディアスポラの定義をもたらすことになるのかという点について論じたい。そのためまずトルコにおける移民研究の中での「ヒジュラ」の位置づけを示すことによって、「ヒジュラ」が移民研究においてはイスラーム・ディアスポラに相当するということの論拠を示しておくことにする。その次に、本論文におけるウイグル人移民集団の「ヒジュラ」経歴を詳しく論じることによって、イスラーム教徒であるウイグル人移民集団のディアスポラとしての位置づけを確認しておく。最後に、「ヒジュラ」をディアスポラへと統合することの学問的意義についてまとめておく。

序章の先行研究において触れたように、トルコの移民研究の中心にあるのはエスニック集団としての「トルコ人」である。トルコ国民の移動によってトルコにおける移民研究は「国外への移住」(dış göçler)と「国内における移住」(iç göçler)に集中している。こうしたなかで、トルコへ移住してきた一部の移民を国内における移住のカテゴリーにおいて検討し、その際、彼らを「ムハジール」として検討することがなされている。

イスラーム社会であるトルコ共和国というホスト社会と、例えばウイグル人というイスラーム教徒である移民との関係において、「ムハジール」という語を用いることが適当なのかという点については、近代化を背景とする現代移民研究の視点からも考察する必要がある。

本章ではこうした移民研究の枠において、「ムハジール」の概念が移民研究に適用されることによって、宗教と無縁であるエスニックな、または民族的な移民のありようが捉えにくくなる恐れがあることを、ウイグル人移民集団の移住歴を表す「ヒジュラ」という言葉とともに検討したい。そうすることで、ヒジュラよりもディアスポラという語のほうが、ウイグル人移民集団のグローバル的位置づけをよく表せるであろうことを議論しておきたい。

内藤正典は、ドイツにおけるトルコ系移民の研究を通じて、移民の行動によって国家の基本原則が問われることを検討してきた(内藤 1997)。内藤によればドイツの憲法ではエスニック集団としてのドイツ人が上位のカテゴリーにあり、エスニック集団としての「ドイツ人」という背景を持つ難民や被追放者は、ドイツ国籍をとった場合にこの上位カテ

リーの「ドイツ人」になれる。一方、それ以外のエスニック集団としての「ドイツ人」の場合には、国籍を取得して下位のカテゴリーであるドイツ国籍保有者たるドイツ人になれても、上位カテゴリーとしての「ドイツ人」にはなれないと指摘する(内藤 1997:758)。

内藤が指摘したような国家の基本原理が移民政策に影響するという問題は、トルコにも見られる。例えばトルコ憲法第 66 条は、「トルコの国籍を有する全ての人間はトルコ人である」と明記してある。またトルコ共和国の居住法(İskan Kanunu)の第 3 条の e には「トルコ系であり、またトルコ文化と繋がっており、定住の目的で単身で、もしくは集団的にトルコに入国したものを本条件に従って受け入れる(2006 /9/26)」と明確に記してある³¹。この法律条件に従えば、トルコにおいても内藤が指摘した「ドイツ人」のように「トルコ人」という上位カテゴリーが存在し、トルコ系且つトルコ文化圏の移民がこのカテゴリーにあたることがわかる。

トルコに集団的移民として受け入れられたウイグル人ら(ウイグル・ディアスポラ集団)も上記の政策に合致する。このような移民の一人であったメフメット・ジャンテュルク(本章の第 2 節 2-1 で詳しく述べる)も自分たちが移民として入国許可を与えられたことを語っている(Cantürk 1995:19)。

イスラーム世界に共通するムハジールに相当するウイグル人たちの「ヒジュラ」は、ディアスポラとして表現することが可能なのか、あるいはムハジール集団をディアスポラ集団として読み替えることができるのか。以下の内容において T 地区住民のヒジュラ歴を全面的に論述することで、この問題を検討してみる。

第1節 「ヒジュラ」が発生する背景

1-1 「ヒジュラ」という概念

「ヒジュラ」は『イスラーム世界事典』によりばアラビア語で移住の意味である(片倉 2002:318)。また B・S・ターナーはヒジュラは移住、あるいは血縁関係の破棄を意味する(ターナー 1986:44)と指摘する。『イスラーム研究ハンドブック』では、①622 年、(イスラームの開祖)ムハンマドをはじめメッカで迫害されていたムスリムたちがマディナに移り住んだこと、聖遷、②現代の復興運動のコンテクストでは、「墮落した」現状を離れた場所に理想的なイスラーム社会を建設すること(三浦 1995:375, 376)という解説がある。

前の①の解釈からは迫害されてからの移住が注目すべき点であり、ヒジュラの迫害から避難するという意味がうかがえる。②の解釈で注目する点は新しい場所で理想を実現させることである。以上の解釈をまとめてみると、「ヒジュラ」は「(故郷における)迫害から逃れて新しい(迫害がない)場所で自分たちの理想的な(イスラーム)社会を建設する」という意味を持っている。

トルコ語においては、「ヒジュラ」のもつ移住という意味を示すギョチュ(göç、ウイグル語では koch)という概念がある。ギョチュ「経済、社会、政治などの問題で個人や集団が一つの場所からもう一つの場所に行くこと、あるいはヒジュラすること」(Parlatır, Gözaydın 1998:863)である。

本論文の調査対象である T 地区の住民は自分たちの移住経歴を語るとき「ヒジュラ」と言うが、自分たちの行動を「ギョチュ」とは言わない。その原因をイスラーム暦に求めてみると、ムハンマドは迫害を受けて、メッカからマディナにヒジュラ(移住)したが、それは一時的な行為であり、結果的にムハンマドはメッカに戻ったのである。この点から「ヒジュラ」には帰還意識も表現されていることが推測できる。この意味ではギョチュには「移住」の意が含まれるが、帰属意識まで含意していないため、T 地区の住民たちに用いられていないのだと考えられる。

この問題を以下の内容においてウイグル・ディアスポラ集団のヒジュラ歴を通して論じておく。この際、主にウイグル・ディアスポラの出版物『青い旗』にあるジャンテュルクの回想録³²と T 地区住民から得られたインタビューなどの資料と合わせて詳しく展開していく。

1-2 「ヒジュラ」の背景

1-2-1 国内背景

ここから本題に入る前に、先ず、ウイグル・ディアスポラが発生する地域の名称に関して少し触れておく。ウイグル・ディアスポラ集団は自身の故郷を「トルキスタン」、或は「東トルキスタン」と表現する。トルキスタンに関して新免康は以下のように述べている。「アジア大陸の中央部は、定住民(農業民、都市民)の居住するオアシス地域と遊牧民の居住する地域からなる。(中略)九、十世紀のトルコ系民族の移動(中略)十世紀以降、イスラームの流入により、(中略)中央アジアの相当部分がトルコ系ムスリムの世界となり、その範囲は拡大してきた。定住と遊牧の関係、トルコ系言語・文化という側面に着目して、トルコ系民住が主に居住する領域を(中略)トルコ系住民の地という意味で、トルキスタンと呼称することがある」(新免 1994:110)。「このトルキスタンは、十八世紀後半に東半(タリム盆地周辺のオアシス地域と天山山脈を中心とする遊牧地域)が軍事的征服によって清朝の版図に入り、十九世紀後半には、西半(フェルガーナ盆地、マーワラーアンナフル)がロシア帝国によって分割され占有された」(新免 1994:111)。「中国に組み込まれたトルキスタン東側の地域は、中華人民共和国の新疆ウイグル自治区に含まれている」(新免 1994:112)。

新免のように歴史学的立場から中央アジアの連帯性を強調しながら東トルキスタン地

域の独自性を重視する研究者もいるが、一方後述する、東トルキスタン問題は中国の国内問題であるとして論議する研究者(王 1995)もいる。

ここで筆者はT地区住民の「ヒジュラ」の記憶に残る名称として、新免の説明する「東トルキスタン」と中国領新疆ウイグル自治区をあわせて、東トルキスタンと統一して呼ぶことにしておく。以下の内容において、東トルキスタンの独立運動とそれへの中国の対応とがヒジュラの背景であることを論じておきたい。

東トルキスタンという概念は、1933年にカシュガルを中心に作られた東トルキスタン・イスラーム共和国、及び1945年にイリを中心につくられた東トルキスタン共和国との関連が強い。加々美光行によると中国共産党は当初党の綱領にも「民族自決権」を明確に記したうえ、「東トルキスタン」という概念もそのまま引用してきたと指摘する。なお、1951年に中国が朝鮮戦争に出兵してから後、冷戦に巻き込まれるとともに「民族自決権」否定の立場を明確にしていくという(加々美 1992:146-147)。このとき「ヒジュラ」の必要性も生まれると言える。

東トルキスタンは1956年に正式に「新疆ウイグル自治区」として成立したが、それ以前から自治区内は各少数民族の自治州から自治村にまで細かく分割され、ウイグル人の統制権力が弱体化し、各民族との利益関係も対立するようになってしまっていた(Baymirza 1975:334)。例えば、北新疆のイリ地域は当時ウイグル人口が70%を占めていたという事実があったにもかかわらず、人口の20%も占めないカザフ人を対象にしてイリ・カザフ自治州が作り出された。また当時の人口の95%以上がウイグル人であったにもかかわらず、コルラ市を中心として人口が当時1%にも満たないモンゴル族を主体としたバインゴリン・モンゴル自治州が作り出された。さらに1911年、ロシアの迫害を受けてロシア領のトルキスタン地域から逃げてきたキルギス人のためには、アトシ市を中心にしてキズルス・キルギス自治州がつけられた³³。こうした形でウイグル人が集中的に住んでいた地域もほかの少数民族に自治地域として与えられたのである。

社会主義体制を国体にした中国共産党政府は、社会資本や資源を国有化するために、一連の社会運動を起こした。1956年から人民公社運動が始まり、私有財産を認めない公社化運動では、先ず農民の土地が国有化された。それに続いて私有財産も国有化され、土地と私有財産を失った農民は無産階級になり、無産階級革命によって建設された中国の主人公となった。しかし、その本質は「公社の社員として飢えても毎日18時間以上働かなければならないこと」(Türksoy 1994:15)だった。

公社化運動と同時に共産党政府は民間の知識人を対象にして思想改革運動に乗り出した。中国では資本主義思想を持つ人々に対する改造運動だが、東トルキスタンではウイグル人の独立、或いは、そのような意見に賛成する人に対する弾圧であった。この時点から

東トルキスタンではウイグル人の民族主義運動を弾圧することが中国政府の最も大きな課題となった。この時の事情に関してジャンテュルクは以下のように語っている。「中国の支配下に置かれてまもなく、全地域で旅行が禁止された。公社化運動が完成するまで食料は計画的に手配されて、できるだけ削減された。各公社、各地域の間における情報交換も禁止となった。さらに、町で出会った人々のお喋りも、家族間の訪問も禁止となった。子どもたちも家族の話の内容等を報告するよう勧誘された」(Türksoy 1994: 15~16)。

社会主義改造運動は東トルキスタンで烈しい反発をもたらした。1956年と1958年のホタン蜂起などがその代表的な例である³⁴。しかし、いずれも中国政府に鎮圧されてしまった。この地域に閉じ込められて、外の世界との連携が出来ないまま闘争を続けることは、大きな犠牲のみを強いる行為であり、外の世界にウイグル人の声を伝えることが重要なこととして認識されるようになった(Türksoy 1994:18)。

1-2-2 国際的背景

「ヒジュラ」の発生は中国の国際進出とも深く関わっている。1960年、中ソ関係が悪化して、中国ではソ連の修正主義³⁵を批判する声が上がっていた。その背景には、1955年のソ連共産党第20回大会が中ソ関係に傷をつけたことがあった(中嶋 1978:235)。第二次世界大戦後冷戦下において兄弟になったソ連と中国の二大社会主義国家は、経済利益や軍事技術の活用にともない、意見の相違が発生し出したのである(中嶋 1978:236)。

従来、ソ連が社会主義圏の代表者として国際社会で活躍してきたが、ソ連との関係が悪化するとともに、中国は独立した国際関係の道を模索し始めた。1954年から中国共産党政府は「平和五原則」³⁶を外交策としてとりあげ第三世界に輸出し、アジア・アフリカ会議などを経て、1971年に中華民国に代わって国連常任理事国になることができた。

国連に加盟するために中国の周恩来総理が積極的に外交活動を行い、アジア・アフリカ各国を訪問するとともに各国の首脳を中国への訪問に誘っていた。その際、アフガニスタン国王も北京に訪問した。このとき、アフガニスタン国王が周総理に対して、新疆ウイグル自治区に滞在しているアフガニスタン人の帰国を許可するよう会談の席で交渉した³⁷。

このような背景において、1959年、中国政府とアフガニスタン政府の間で移民に関する協議が署名された。協議の内容は、東トルキスタンにおいて自分がアフガニスタン人であること、或いはアフガニスタンの国民と何らかの関係があることを証明できれば、アフガニスタンに移住することができるというものであった。この協議を受けて東トルキスタンではアフガニスタンに「ヒジュラ」する者が参集した。

1-3 「ヒジュラ」に関わった市や町

ヒジュラ・メンバーはヤルカンドの人々を中心に、更にカシュガルとイリの人々から構成された。東トルキスタンにおいてこの三つの市は特別な歴史的背景を持っている。

先ず、カシュガルは 11 世紀のカラハン朝の首都である。カラハン朝はトルコ系民族のなかにおいてイスラームを国教にした最初の国である。トルコ系諸族に関する『トルコ語大辞典』はカラハン朝時代に完成された名著である³⁸。19 世紀末にはイスラームのマドラサ教育の改革や近代教育体制の展開等がカシュガルでスタートした。1935 年には女子学校を含む「科学学校」がカシュガル及び周辺地域で普及したのである(清水 2007:73)。また 1933 年に樹立された「東トルキスタン・イスラーム共和国」の首都もカシュガルであった。

次に、ヤルカンドは 16 世紀に建国されたヤルカンド王国の首都である。ヤルカンド王国時代のヤルカンドにはインドや、カシミール地方と交易をする国際バザールがあった。またウイグル音楽文化の基盤であるウイグル・オンシキマカム(12muqam)がヤルカンド王国第 2 代国王の主導で整理された³⁹。ヤルカンド王国の時代には、スーフィズムが中央アジアから流入し、ヤルカンドを中心にスーフィ教団が作られた。

最後に、グルジャはウイグル社会の近代化において重要な都市であった。ウイグル社会の初めての近代的工場が 1895 年ドイツから輸入され、グルジャに建設された。20 世紀の初めにロシアの迫害から逃げてきたタタールの知識人の影響を受けて近代ウイグル教育も盛んとなった⁴⁰。またイリは 1944 年から 1949 年の間存在した「東トルキスタン共和国」の首都でもあった。



図 2 ヒジュラの移動地図(筆者作成)

第2節 「ヒジュラ」の発生

2-1 「ヒジュラ」にかかわった人物

「ヒジュラ」以前の中国の状況は 1-2 で取り上げた通りである。社会的情報交換が厳し

く制限されていた当時、ヒジュラのメンバーは「ヒジュラ」に関する情報を如何にして手に入れたのだろうか。そのときの複雑な社会環境のなか、全てに注意をはらって、計画を立てるリーダー的な役割を果たす人物がいたのだろうか。

実は、「ヒジュラ」を最初に計画して実行に移すまで、中心的役割を果たした二人の人物がいた。一人はメフメット・ジャンテュルクである。ジャンテュルクはマドラサ教育を受けた人物で、アラビア語やペルシア語が堪能で、当時はヤルカンド市のあるモスクの導師(イマーム)で、見聞の広い知識人だった。ジャンテュルクの学習歴は我々に二つの重要な情報を提供している。一つはヤルカンドにおいては、少なくとも中国共産党が来る1949年までイスラーム教育がかなりの割合を占めていたこと。もう一つはジャンテュルクがヤルカンドでアラビア語とペルシア語を勉強したということは、当時東トルキスタンでこの二つの言語がイスラーム教育の内容に含まれており、この二つの言語を理解できた人がかなりの率に上っていたであろうことである。ウイグル社会がイスラーム社会圏と継続して繋がりをもっていたことも指摘できる。

もう一人はセイト(サイイド)・アブドヴェリ・ハンホジャ⁴¹(以下セイト・ハンホジャとする)である。彼は当時ヤルカンド、イエニシェヘル(新城)モスクのイマームだった。セイト・ハンホジャー族は預言者ムハンマドの末裔としてヤルカンドにおける名門であった。セイト・ハンホジャのこのような出身が「ヒジュラ」に果たした役割も重要であった。セイト・ハンホジャの長男のセイト・リデワンは筆者のインタビューに対してこう語っている。

「ヤルカンドにいたとき自分がサイイドであることに関して誇りを持っていた⁴²。父の教えに従い、人々の前でそのことをあまり口にしなかったが、わが家族はヤルカンドにおいても昔からサイイドとして認識されてきた。トルコに来てから、父はこのことを確かめるために色々試みた。父のあとを継いで私もそれを続けた。メッカに何回も足を運んで高祖父の代から繋がりがあったサイイド家族の一員と出会い、彼が私蔵していたサイイド家の家系図のなかから高祖父の名前が見つかった。厳密に検討した結果自分たちはサイイドの一員であることが確認され、自分たちの名前も彼らの家系図に記入された。そして家系図のコピーがわたされた」。

セイト・リデワンがサイイドであることを示す家系図とするものが保存している。それは幅が2平方メートルの白紙に預言者のムハンマドの家族を中心において、妻のアイーシャとの間に生まれた子どもたち、つまりサイイド家系の成員を花のように散らして描いたものである⁴³(図3参照)。

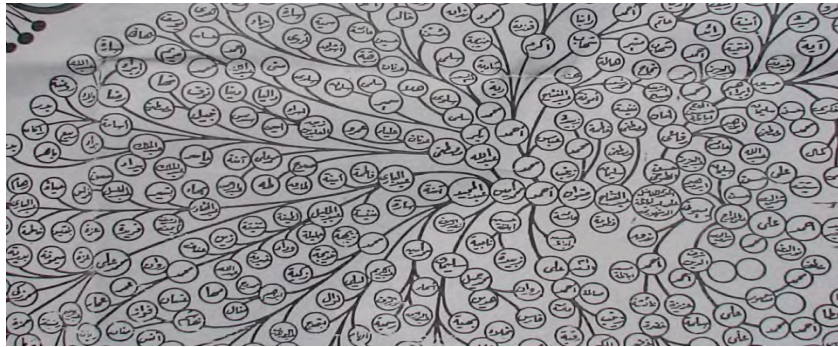


図 3 セイト家の家系図の一部 (筆者撮影)

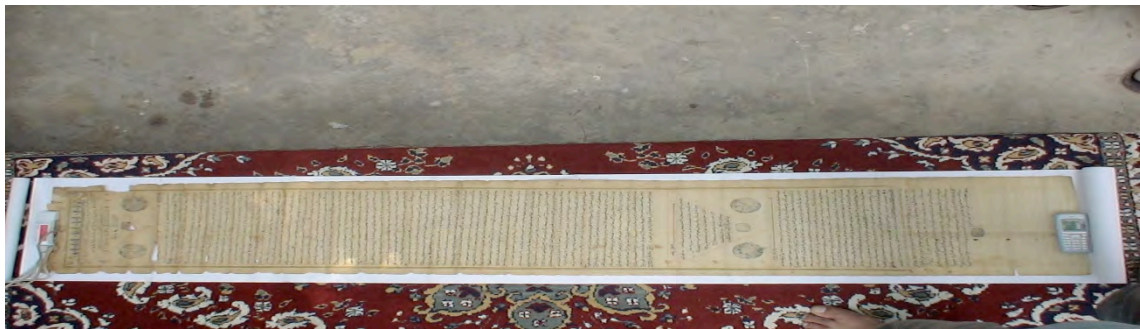


図 4 セイト家私蔵文書 (筆者撮影)

図 4 はセイト・リデワンが私蔵している、長さ 197 センチ、幅 50 センチのアラビア語の文書である。彼によると文書は父が守ってきた家族の宝物だという。これは 1850 年代にメッカからきた高祖父が残した文書で、載せてある内容は自分たちがセイト家の一員であることを証明しているという。

ムハンマドの末裔がなぜ東トルキスタンに来たのかという質問に対して、セイト・リデワンはこう語った。「19 世紀の中頃、カシュガルを中心にヤクブ・ベグがアルテシェヘル王国を建国した。当時のウイグル社会にはスーフィ教団の「偽サイド」があふれていた。またスーフィ教団の布教によってアルテシェヘルの民がイスラームの正統から離れていたのである。アルテシェヘルの民は国王のヤクブ・ベグにメッカからムハンマドの末裔である本当のサイドを招き、正統的なイスラームを布教するよう呼びかけた。ヤクブはメッカに使節を派遣して私の高祖父を招請したのである。高祖父はメッカで家族を持っていたが、ヤルカンドで再婚して 27 年間ヤルカンドで布教してきた。晩年メッカから長男が来て彼を実家に連れて帰ったが、ヤルカンドで作った家族をアルテシェヘルの民の願いにより残した」。

セイト・リデワンが筆者に見せたサイドとしての証拠が実物かどうかについて筆者に

は考証できない。メッカには、ヤクブ・ベグが国王の時代にトルキスタンから巡礼にきたムスリムが使うために造った「トルキスタン・ラバット(トルキスタン・ホテル)」が今でも存在する⁴⁴。ヤクブ・ベグがメッカにラバットを造った時期とセイト・リデワンが語った高祖父がヤルカンドに来た時期とは一致する。しかし現代東トルキスタンにおいては偽サイイドの伝説が多く、ムハンマドの末裔が東トルキスタンに来たという文献資料がないため、さらなる研究が必要である。

イスラーム世界においてムハンマドの子孫はサイイドと呼ばれる。サイイドはムハンマドの子孫としてアラブ人であることが常識だが、イスラームの拡大にともない、非アラブ地域にもサイイド(セイト)が広がったのである。例えば小杉はアフガニスタン生まれのジャマルッディーン・アフガーニーがサイイドであることの可能性を指摘する(小杉2006:201)。そういう意味では、セイト・リデワンの話も根拠がないわけではない。

いずれにしても預言者ムハンマドの末裔として知られてきたセイト家の影響力が「ヒジュラ」にとっては極めて重要であった。二人の重要性は「ヒジュラ」の過程からも見られる。これに関して以下の内容で述べたい。

2-2 「ヒジュラ」が発生する理由

1-2の内容において「ヒジュラ」が生じた国内的背景として新疆ウイグル自治区の設立を取り上げた。自治区が設立されたことでウイグル人の生存空間が“奪われ、様々な問題が生じた。その主な矛盾はウイグル人とほかの少数民族の間におこっているようにみせられてきた。「ヒジュラ」の背景を中国国内レベルの背景から自治区内レベルの背景に移してより詳しく論じておきたい。

「ヒジュラ」が発生したヤルカンド地域の当時の社会の雰囲気はどうだったのか。この時期1961年にウイグル社会は中国共産党政府の管理下におかれて十年が経った時期だった。中国共産党政府の影響力はどの程度だったのか。T地区から収集した幾つかの事例から当時のヤルカンドの社会を見ておきたい。

ヒジュラ・メンバーが出発した時、二人のメンバーがそれぞれ二人の妻をもっていた。イスラームのシャリーア(イスラーム法)によれば、経済力がある男性は複数の妻を持つことが可能だが、中国の婚姻法においては一夫一妻制が明記されている。共産党政権が1951年に東トルキスタンでも確立され、1956年に新疆ウイグル自治区が成立した。にもかかわらず「ヒジュラ」が発生した1961年にヤルカンドに一夫多妻現象が見られたということは、おそらく中国政府の法体制がその時期にまだウイグル社会で完全に確立されていなかったことを意味しているのであろう。反右派闘争が始まった1957年8月から「新疆」を「東トルキスタン」という名称に変えること、漢民族の移民を停止させること、などとい

ったウイグル人の要求に対して「地方民族主義」批判が起こった。多数のウイグル知識人らが粛清された「地方民族主義」批判がひととおり終了した段階から再度はじまったのが、漢族の大量移民入植であった(加々美 1992:159)。つまりその10年間、政府はウイグル社会を憲法や法体制の管理下において統治したのではなく、逆に様々な政治運動を起こして、社会を無政府状態においたのであった。加々美は文化大革命まで新疆において地方民族主義として批判の対象となってきたのは、常にウイグル、カザフ等の少数派民族の指導者であって、そのなかに漢民族指導者が含まれることはあり得なかったと指摘する(加々美 1992:178)。

政府が特に知識人などを「改造」の対象としたことに関してジャンテュルクは次のように述べている。

「この時(つまり1957年前後、筆者注)共産党政権は全てのイマームやウラマー(宗教知識人)を集めて、8ヶ月の勉強会を開いた。学問とは何の関係もなかったこの勉強会は、イスラーム教徒の動向を気にした政府がイマームやウラマーに対して、宗教を通じて反中国の行動をとることを防ぐために行われたとする政治的動員だった。イマームやウラマーたちに圧力をかけた後、6ヶ月の勉強会を開いて、今度は学校の講師たちの中から民族主義傾向が強い教師たちを選んで、厳しい処分を行った。こうした圧力に耐えられなかった二人の講師のうち一人がナイフで首を切り、もう一人はモスクの屋上から飛び降り自殺をした」⁴⁵(Türksoy:1994:20)。

ジャンテュルクの発言から、少なくとも1960年代まで、ヤルカンドの社会はイスラームの伝統に基づいて成り立っており、中国政府が起こした政治運動は、このような伝統を保持している社会を改造するためのものであったことが分かる。イスラーム的な伝統を継続して保ち続けるなかで中軸的な存在であるイマームやウラマー、そして知識人に対する弾圧がウイグル社会に危機感を与えたのである。

ジャンテュルクの「ヒジュラ」の計画はどのように立てられたのだろうか。当時ジャンテュルクは一人の昔のクラスメートから一枚の新聞を手に入れた。そこには、1959年8月、中国の毛沢東と当時のアフガニスタン大使ムハメット・ダヴットシャフとの間に両国間の経済、文化、政治交流を深める協議が行われたという記事が載っていた。ジャンテュルクはこのチャンスを利用して、アフガニスタンにヒジュラし、東トルキスタンでの出来事を外の世界に伝えようと考えた(Türksoy 1994:19)。ジャンテュルクの次の話を見てみよう。

「私は、中国が侵略してくる前、父とイブラヒム・アジという人物との会話を通して、オスマン朝やイスタンブールなどに関する情報を得た。イブラヒム・アジは人民解放軍が侵入してくる前は、ヤルカンド地域で広い土地を持ち、豪農の一人であったという。1900

年の初頭、彼はメッカ巡礼にでかけた。ロシアのモスクワ経由で行ったこの旅において彼は外側の世界を知り、目が覚めた。イスタンブルで一時滞在した後、イブラヒム・アジは東トルキスタンに戻り、オスマン帝国やロシアが占領したトルキスタン地域に関する情報を伝えた。このような情報が当時学生であった私の記憶に深く残っている」(Türksoy 1994:19)。

ジャンテュルクの以上の話からウイグル社会は共産党政権が成立するまで、イブラヒム・アジのような人々を通じて外の世界との情報交換を行ってきたことが分かる。近代ウイグル教育の嚆矢であるジャディード教育の歴史をみると、このような繋がりには清朝の時代やそのあとの軍閥、国民党政権の時代も続いていたのである。しかし、中国共産党政権下に置かれたウイグル社会は外の世界と完全に隔離された状態であった⁴⁶ため、中国内の新聞が唯一の情報源になった。

要するに、「ヒジュラ」が発生した理由は中国政府から弾圧や迫害を受けたウイグル社会がイスラーム社会であったことにある。当時のウイグル人の富裕階層や知識人は現地において影響力を持つムスリムであり、迫害に遭った場合ウイグル社会に「ヒジュラ」するよう呼びかけることができたのである。一旦「ヒジュラ」の可能性が生じた場合、すぐに大勢の賛同者が出てきたのは、「ヒジュラ」を認識する社会的雰囲気が存在したためだと思われる。言え換えると、ウイグル社会は中国政府から宗教、信仰の面でも言語、エスニック文化の面でも迫害をうけたため、同じイスラームの地域であるアフガニスタンに「ヒジュラ」する形で脱走しようとした。つまり、「ヒジュラ」は「迫害」から逃れる行動であった。

2-3 「ヒジュラ」の成功

ジャンテュルクは知識人として、「ヒジュラ」のチャンスが生じた後、先ずアフガニスタンまで集団的移動の可能性に関して熟考した。

「私はこのことについて、まずガフル・アジ(ガフル・アイデン)と相談することにした。ガフル・アジの叔父は商売人で、中国共産党の支配の後パミール高原の草原地に住むキルギス人と商売をしてきた。ガフル・アジは叔父とある秋の終わりごろ、パミール草原に行ったことがあり、道をよく知っている人であった。私はガフル・アジとこの話をした後、一緒にヤクフ・アジの家を訪ねた。話し合った結果、具体的な情報を得るためにアフガニスタンの北京大使館に手紙を送ることにした。ほぼ一ヶ月後アフガニスタン大使館から確認の手紙が手元に届けられて、アフガニスタンに移住する目的である人は、アフガニスタンからの招待状を持って、アフガニスタンの北京大使館に申請すればいいという内容だった」(Türksoy 1994:19)。

ジャンテュルクがアフガニスタン大使館に書いた手紙はペルシア語だった。内容は、自分がアフガン人である場合、アフガニスタンに戻るためにはどのような手続きが必要か、というものであった。アフガニスタンにおいてペルシア語は公用語の一つであり、ジャンテュルクがペルシア語で書いた手紙がアフガニスタン大使館の信用を得られたと考えられる。ジャンテュルクに届けられたアフガニスタン大使館からの手紙の内容は以下のようなものであった。

「我々の兄弟ジャンテュルクの息子マフメット殿

お手紙は大使館に届けられました。ご自分がアフガニスタン人であるという人がアフガニスタンに戻られるということを、貴方経由でほかの仲間にも伝えてください。戻るために彼らも個人名義で大使館に申請書を出して手続きをしてください。申請書は以下の手順でご記入ください。

1. 氏名
2. 父と祖父の名前
3. 彼らがどういう形で何の目的で新疆に来たか
4. パスポート或いはアフガニスタンの身分証の履歴と登録番号
5. アフガニスタンでの居住証明書
6. ヤルカンドでの居住証明書

申請書はできるだけ早めに出してください。申請書を早く出せば出すほど、出発手続きもそれだけ早く進みます。同行の方々にもそう伝えてください。(一部略)

第一秘書:アブドラズム(印)」

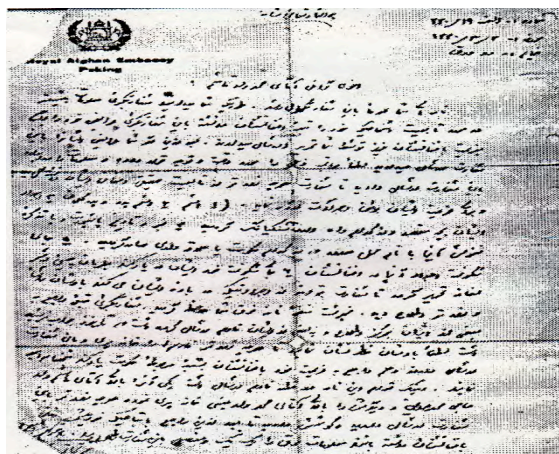


図 5 アフガニスタン大使館からの手紙(『青い旗』1994年第2号)

アフガニスタン大使館が手紙(図5)の中で「我々の兄弟」という呼称を使っているところからみれば、アフガニスタン大使館はジャンテュルクのペルシア語で書いた手紙の内容を疑わなかったことがうかがえる。早速に返事が返ってきたこともジャンテュルクの手紙が「兄弟」から届けられたものとして重視されたのであろう。筆者の記憶によれば、中国国内では1990年代においても親戚からの手紙が届くのに、一ヶ月もかかったものであった。それと比較すれば1960年代の中国というのは「革命の時代」であり、郵便が中国国内において中央から地方の辺鄙な町に無事に一カ月のスピードで届いたことは奇跡ともいえるほどの出来事であった。

ジャンテュルクはこの情報をまず自分が信用できる人のみに伝えて、アフガニスタン大使館が指示した通りに申請書を書くように勧めた。「ヒジュラ」したい人が多かったが、皆中国政府を怖がって傍観する人も多かった(Türksoy 1994:20)。そこで冒頭に述べたもう一人の人物、セイト・ハンホジャが登場したのである。セイト・ハンホジャはこの情報を聞いた時、ジャンテュルク同様、「ヒジュラ」を考えて申請書を出した。

セイト・ハンホジャがアフガニスタン大使館に申請の書類を出したことや大使館から確認の通知がきた(図6)ことが公表された後、広範囲に参加者が募られた。しかしながら当時中国政府が各オアシスや地域の間における旅や相互訪問を厳しくコントロールしていたため、申請者はヤルカンドに限られた。

上記のアフガニスタン大使館の示した条件をみれば申請者は自らがアフガニスタンから来たという証明書を見せる必要があった。ではヤルカンドの人々はどのようにアフガニスタン大使館から許可を手に入れたのか。セイト・リデワンは次のように語った。

「「ヒジュラ」参加者のだれもアフガニスタン人と何らの関係もなかった。わが家族も例外ではない。当時ヤルカンドには確かに何人かのアフガニスタン人が共産党が来る前から商売に来ており、ヤルカンドに居住していた。人々は彼らを通じてアフガニスタンからの手紙などを手に入れ、それを使って大使館に申請を出した。」

セイト・リデワンの話からヒジュラ・メンバーがどのようにして「アフガニスタン人」になったかがわかる。ジャンテュルクも回想録でヒジュラ・メンバーがアフガニスタンに到着した後、以前ヤルカンドやホタン、イェニシエヘルなど東トルキスタンの市や町で商売していた際に知り合ったアフガニスタン人らが訪問にきて、色々援助してくれた(Cantürk 1995:18)と述べている。こうしたことから、共産党政権が確立するまでアフガニスタンとヤルカンドの間では商売の道が開かれていたこともうかがえる。

以上の内容をまとめてみると、「ヒジュラ」は知識人ジャンテュルクの計画のもとに、

イマームであるセイト・ハンホジャの影響を受けて多数の参加者を集めたことがわかる。

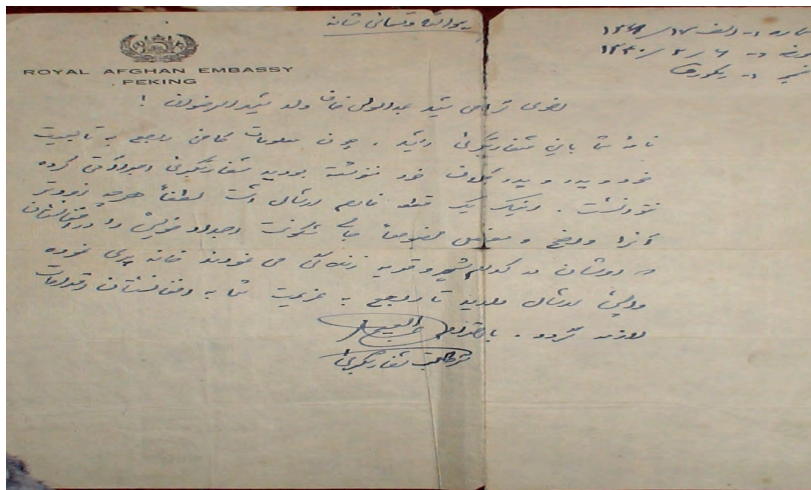


図 6 セイト・ハンホジャに届けられた手紙(セイト・リデワン保存)

ここで明らかにしておくことがあるとしたら、それは「ヒジュラ」は受動的な行動ではなく、被害を受けた側が計画的に行った積極的な自助行動であるということだろう。

第3節 トルコへの「ヒジュラ」

3-1 背景

ヒジュラ・メンバーがアフガニスタンに「帰国」した後、4年後再びトルコに「ヒジュラ」するという出来事が起こった。これはなぜだろうか。

ヒジュラ・メンバーは幾つかのグループに分かれ、最初の34世帯(128人)が1961年3月24日に、ヤルカンドからアフガニスタン国境に向かって出発した。そして8月の中旬にアフガニスタンのバダフシャン市に到着した(Türksoy 1994:20)。1962年7月までに合わせて4つのグループがバダフシャンに集まった(Cantürk 1995:18)。1963年の中頃、ヒジュラ・メンバー170世帯がカブル市に移住した。

ジャンテュルクによればヒジュラ・メンバーはアフガニスタンに入った時点からアフガニスタン社会から様々な援助を受けたという。例えば、アフガニスタン国境に入った時大雪に遭ったヒジュラ・メンバーは飢餓に苦しみ、狼に襲われたりした。その時、遊牧キルギス人に助けられたという(Türksoy 1994:19)。また国境からバダフシャンまでの間、沿路の部落や村落の居民たちが自らヒジュラ・メンバーに食料を提供してくれたのである(Türksoy 1994:19)。バダフシャンでは知り合いのアフガニスタン人たちの援助が多かった。ジャンテュルクはアフガニスタン社会の援助は彼らがアフガニスタンから出るまで続

いたと述べている。このような援助は非アフガニスタン人たちからもなされた。例えば、アフガニスタンで知り合ったパキスタン人の知識人はジャンテュルクにアフガニスタンや国際社会に関する様々な情報を提供し、後にヒジュラ・メンバーがアフガニスタンから再びヒジュラしなければならない状況に遭遇したとき、またこのパキスタン人の知識人が、ジャンテュルクに彼らと同じトルコ系のトルコに「ヒジュラ」することを提案したという。

アフガニスタン社会から援助があった理由は、おそらくヒジュラ・メンバーをイスラーム教徒として認めたからだと考える。例えばキルギス人の援助を受けた時、最初に出会ったヒジュラ・メンバーがキルギス人の前でコーランを暗唱して自分たちがイスラーム教徒であることを証明したのであった(Türksoy 1994:19)。またあるグループのヒジュラ・メンバーの入国が認められず辺境軍により強制的に中国側に送り返されようとしたとき、ヒジュラ・メンバーがアフガニスタン国境治安隊の大佐に同じイスラーム教徒として援助するよう呼びかけたのである。その結果送り返されようとしていたヒジュラ・メンバーがこの大佐のとりなしでアフガニスタンに残ることができたという(Cantürk 1995:19)。

アフガニスタン社会の庶民の熱心な援助に対して、政府側は慎重な姿勢を見せた。ジャンテュルクによれば彼らがカブル市に居住して安定した後、マスメディアで東トルキスタンに関して新聞記事を書くことやラジオ放送を行うことを求めたが、全てが拒否されたという(Cantürk 1994:16)。

アフガニスタン政府の対応はおそらく中国との関係に配慮しなければならなかったからであろうと推測できる。ジャンテュルクは回想録において、アフガニスタン政府がこうした懸念を直接伝えてきたことを語っている(Cantürk 1994:16)。当時アフガニスタンのカブル市には国連難民高等弁務官事務所(UNHCR:United Nations High Commissioner for Refugees)⁴⁷のオフィスがあり、アフガニスタンは政治難民を認める国際難民法協議国であった。このことがヒジュラ・メンバーがアフガニスタン人を装って入国したことがすぐ発見されたにもかかわらず、アフガニスタン政府が彼らを中国に送り返すことを断念した理由の一つだと考えられる。

セイト・リデワンはアフガニスタンから再び「ヒジュラ」する理由をアフガニスタンでの政治活動が禁止されたからだとしている。父のセイト・ハンホジャは、1964年7月14日にカブルにおいて「東トルキスタン・ムハジール協会(شەرقى تۈركىستان مۇھاجىرلار جەمئىيىتى)」(以下「ムハジール協会」)を創立して、公式に会員を募集し始めた(「ムハジール協会」に関しては第4章で詳しく論じる)。一方、ヒジュラ・メンバーを見張っていた中国の駐カブル大使館は、アフガン政府にヒジュラ・メンバーを中国に送り返すことを要求した(Cantürk 1995:16)。ジャンテュルクはこれに関してこう語っている。

「ある日カブル市役所から呼びだされた。私は市役所の外国人管理局の局長の前に立つ

た。彼は鞆の中から一枚の紙を出して私に読むように命じた。私が2、3回繰り返して読んだ後、彼は紙を再び鞆に入れた。それで私に「今のうちに対策を考えよう」と言った」(Cantürk 1995:16)。

ジャンテュルクに見せた紙は、1961年パミール草原からアフガニスタンに入国したヒジュラ・メンバーを1964年7月22日までに中国の国境防衛軍に引き渡すことに関するアフガン議会の決議であった(Cantürk 1995:16)。4年経た後にアフガニスタン政府がヒジュラ・メンバーを中国に送り返すことを決議したのは、おそらく中国から外交的圧力がかったからだと思われる。1964年7月14日に「ムハジール協会」が成立したことと、アフガニスタン議会が1964年7月22日にヒジュラ・メンバーを送り返すという決議をしたことから、中国政府とアフガニスタン政府がヒジュラ・メンバーの住民としての滞在を黙認しても、政治活動までは許可しない立場であったことがわかる。

一方で、外国人管理局長がジャンテュルクにアフガニスタン議会の決議を見せた行為は、国家公務員として相応しいかどうかは別として、ジャンテュルクに対策を考えるよう勧め、ヒジュラ・メンバーに「アッラーのご加護に任せる」と祈って別れた(Cantürk 1995:16)ところからみれば、同じムスリムとしてヒジュラ・メンバーに同情的な行為をしたと考えられる。

以上の内容をまとめると、ヒジュラ・メンバーはアフガニスタンに「帰国」の形で「ヒジュラ」した。アフガニスタン国民としてのアイデンティティを持っていないヒジュラ・メンバーに対して、アフガニスタンの政府と国民は、同じムスリム同士としての認識から、ウンマ社会に帰属させて、アフガニスタンに違法入国した行為を寛容な態度で受け入れた。しかし、それ以上のことは認めず、ヒジュラ・メンバーの行動が政治活動にまで盛り上がった時点で、それ以上の保護をする姿勢を見せなかったことが分かる。つまりヒジュラはウンマ意識に従った社会で理解を得られても、例えば政治活動のようなエスニック集団としての身分を求める行為としては認められなかったことが分かる。このような二重の基準はアフガニスタンを含む、ウンマ社会から国民国家へ変換したイスラーム国家が直面する意識の亀裂を示しているとも言えるだろう。これは後のホスト社会側のトルコにも現れてくる現象として第5章において論じることにする。

3-2 ウンマ社会からエスニック社会へ

ヒジュラ・メンバーがアフガニスタンから出なければならぬ状況に陥った時、他に受け入れる国はなかったのだろうか。実はセイト・リデワンによるとヒジュラ・メンバーはジャンテュルクとセイト・ハンホジャの積極的な活動によりカブル市にある国連難民高等弁務官事務所から難民書を受け取ることが出来たという。ジャンテュルクはトルコ大使館

を直接訪問してヒジュラ・メンバーをトルコに受け入れるよう求めた。大使館は拒否せずトルコ政府に報告した。トルコ政府は彼らが「移民」としてトルコに入国することを許可した⁴⁸。しかしヒジュラ・メンバーのトルコへの移住は順調ではなかった。ヒジュラ・メンバーはトルコに行くことで一致したが、段階的に移住する間に、残りのメンバーの間で亀裂が起きた。

この亀裂は一方で複雑な国際関係を背景としていた。ヒジュラ・メンバーの政治参与を恐れた中国政府の行動とともに、中国と対抗してきたソ連と台湾がヒジュラ・メンバーと積極的に接触を始めたのであった。ソ連側はヒジュラ・メンバーをソ連領トルキスタン地域に移住させる案を示した。これに対して、台湾はヒジュラ・メンバーを台湾へ呼ぶ、もしくは台湾のパスポートを使ってサウジアラビアに行かせることを提案した (Cantürk 1995:18)。

ここでのソ連側の態度は、加々美の研究でもわかるように、ソ連側が悪化した中ソ関係においてウイグル人を政治利用しようとしたことがうかがえる (加々美 1992)。タイラーは当時トルコにおいて政治活動を行っていたウイグル人政治家エイサ・ユスフ・アルプテキン (第5章に詳しく述べる) も、この時ソ連政府から、中央アジアにきてウイグルの独立運動を指導するよう呼びかけがあったと述べている (Tyler 2004:225)。台湾もウイグル人らを国共両党⁴⁹の戦いに取り込む狙いをもっていただろうかがえる。また台湾は、ヒジュラ・メンバーが台湾を選択しなかった場合に、台湾の国民として中東イスラーム世界に入植させることによって、ヒジュラ・メンバーのムスリムとしての身分を利用して中国共産党政権と対抗する外交戦線を強化する狙いをもっていた⁵⁰。

以上の内容をまとめると、ヒジュラ・メンバーが再び「ヒジュラ」を選択した理由は迫害から逃れることが目的であった。しかし、この迫害には宗教的なものだけでなくエスニック集団としての迫害であったために、ウンマ社会は宗教的迫害からの庇護はしても、「アフガニスタン人」という身分がないエスニック集団としてのウイグル人を庇護することはなく、更なる「ヒジュラ」を招くことになった。つまりヒジュラ・メンバーは宗教的かつエスニック的な庇護が得られる場所、つまり文化的に近いホスト社会の庇護を必要としたのである。ヒジュラ・メンバーの行為からは、ホスト社会と移民の双方が求める「文化的に同じ、或いは近い」基盤というものは宗教的なものよりもエスニック・アイデンティティに依拠したものであるといえる。

おわりに

第1章においては、従来被害から一時的に避難することを示す「ヒジュラ」概念からウイグル・ディアスポラ集団の形成をみた。中央アジアにおいて伝統的なイスラーム社会に

所属するウイグル社会が経験してきた近代化とは、文化的に異なり、かつ非イスラームのエスニック集団である中国という漢族の国民国家⁵¹に統合される形で進行してきた。イスラーム社会の一部であるウイグル社会の近代化から、ヒジュラをディアスポラと見なす判断の適当性をイスラーム世界にどこまで適用出来るのかは更なる研究が必要だろう。

しかしながら西洋の近代的産物とされた民族主義、世俗主義、科学技術、民主主義などの概念は、次々とイスラーム社会に流れ込み、イスラームを近代化へと向かわせたと言うことは出来る。その後の社会主義、フェミニズム、近年におけるテロの概念などもその流れの延長線上にあってイスラーム社会をにぎわした。

このように、所謂西洋的であると見なされてきた諸概念のなかで、イスラーム社会に衝撃的影響をもたらしたのは民族主義と世俗主義である。新井はオスマン帝国の末期、世俗主義が科学技術の「復興」をめざして導入され、しかも、イスラームの枠内で解釈されてきたが、ウンマ社会の解体にともない、「国民国家」の主体である「トルコ人」の法的地位を確保する政教分離という国家体制に代えられたことを指摘する(新井 2001:212)。

世俗主義は、キリスト教社会においては、政教分離する社会理念である民主主義を支える基盤として強く唱られた。世俗化かつ民主主義という西洋(キリスト教)社会と違って、教会の統制がないイスラーム社会においては、世俗主義は最初から民主主義ではなく、民族主義とセットになって政治利用され、イスラーム社会に流れ込んできたのである。

ヒジュラ・メンバーがアフガニスタンから再び「ヒジュラ」したことや、またトルコが彼らを受け入れたことは、アフガニスタンとトルコ、両国民国家が同じイスラーム社会でありながら、別々の「民族主義」的背景を持っていたことを示しているだろう。ゴードンのユダヤ・ディアスポラを伝統的ディアスポラとして、それ以外のディアスポラを近代的ディアスポラとしてきたことを序論で既に述べた。これを「ヒジュラ」にあてはめることにするならば、ヒジュラ・メンバーの再「ヒジュラ」という事実は、その近代的ディアスポラとしての性質を明らかにしているのではないか。「ヒジュラ」はイスラーム教徒がこのような世俗主義かつ民族主義という国民国家の間を走り回る状況は、ゴードンが示した近代的ディアスポラに当てはまるだろう。

これまでヒジュラ・メンバーはイスラーム社会の完全な保護を受けることが出来なくなり、結果的に宗教的かつエスニック的な保護を求めてトルコにヒジュラしたことについて述べた。これまでの議論から、ヒジュラは「イスラーム・ディアスポラ」であると結論するには勿論論拠が足りないだろう。本論文は「イスラーム・ディアスポラ」という概念自体を考察することはせず、事情に合わせて注を付けながら少し触れる程度にとどめるつもりである。しかしその上で指摘すべき一点は、「イスラーム・ディアスポラ」という概念が、「なぜイスラーム社会を西洋化、グローバル化に取り込む作業は困難であるか」と

いう問いを検討する際の鍵となるのは間違いないということであろう。

またユダヤ・ディアスポラのもつ「迫害の受け手となる」という沈黙的な行為と違って、ウイグル・ディアスポラは「ヒジュラ」することで、迫害から積極的に逃れるにとどまらず、迫害をアピールすることでディアスポラを終止させるような行動も継続している。もしアフガニスタンまでのヒジュラを伝統的な被害から逃れるイスラーム社会に見られる行為と見なしたら、再びのヒジュラは迫害をアピールする行為と見なすことが出来る。このような迫害をアピールする行為はウイグル・ディアスポラの特徴として第5章においてさらに取り上げていく。

第1章において近代社会においては、「ヒジュラ」という行為がディアスポラに相当するという可能性を検討し、ウイグル・ディアスポラは宗教的というよりもエスニック的基盤をもっていたことを明らかにした。次の第2章においては、移住後の彼らの婚姻関係からウイグル・ディアスポラのエスニックな内部構造について考察したい。